HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	過疎地の地域づくりにおける生活文化活動の意義
Author(s)	吉田, 弥生
Citation	社会教育研究, 28, 47-63
Issue Date	2010-03-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42856
Type	departmental bulletin paper
File Information	SAE28_004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

過疎地の地域づくりにおける生活文化活動の意義

吉　田　弥　生

目　　次

１．問題の所在 ……４７
２．課題と方法 ……４８
３．中川町のまちづくり ……５０
　⑴　町の概要 ……５０
　⑵　過疎対策の変遷 ……５０
４．エコミュージアムセンター実践の展開過程 ……５１
　⑴　活動概要 ……５１
　⑵　地域講師 ……５２
　⑶　「エコール咲く」調理班 ……５５
５．まとめにかえて　～生活文化活動を通じた地域づくりへの可能性 ……６０
　⑴　「生活文化」を「表現」することの意味 ……６０
　⑵　地域資源認識と地域認識 ……６１
　⑶　連帯形成への条件 ……６１
　⑷　エコミュージアムセンターで形成された地域づくりの論理 ……６２
　⑸　結論 ……６２

1. 問題の所在

グローバリゼーションと新自由主義的改革の犠牲となった多くの地域は、様々な危機に瀕している。たとえば、保母武彦はそうした状況を「地方崩壊」時代と呼び、そこでは「地域経済の崩壊」、「地方行財政の崩壊」と「地域社会の崩壊」が起こっていて、この３つが重なり合って増幅しているという。資本蓄積のグローバル化は、空間的に住民の生活領域を超えるだけでなく住民の生活条件そのものを奪い、さらには否定するところまで立ち入ったのだ[1]。さらに「地方崩壊」は、展望なき歪んだ心理までも作り出すという[2]。すなわち、諸機能の崩壊の影響は住民意識にも及び、生きる希望すら持てない、いわゆる「心の過疎」の状況まで住民が追いこまれているといえる[3]。

こうして地域衰退が進んだ末､住民の生活が維持不可能となり崩壊していく状況が顕在化してきた。過疎地域では、生活の展望のなさや自分自身の無能力感といった生きづらさの末による高齢者の自殺が少なくない[4]。また、山村の集落が「限界集落化」し、管理主体の不在による森林の荒廃が水害等の自然災害を頻発させているなど、生活における負の連鎖が指摘されている[5]。

以上のように、生活環境の悪化にともなった住民の諦めがますます地域の衰退に拍車をかけるという悪循環に陥っていく地域も見られるが、一方で、自然的・社会的・経済的条件が厳しい地域であっても悪循環を断ち切り、住民が自律的に地域づくりを行っている事例も見られることに注目したい。住民が自らや地域への「自信」を取り戻し地域づくりの主体への育ちが見られる事例として､「山村留学」（長野県弥栄村など）や「街並み保全運動」（愛媛県内子町、長野県松本市など)、エコ・ツーリズム（山形県朝日町など）など「住民自身が地域の生活文化をテーマとした活動」が指摘されてきた[6]。本稿ではこのような活動に注目し、そこで住民はどのような学習をしているのか明らかにしたい。それによって、過疎化の悪循環を断ち切るための条件を明らかにすることができると考える。

2. 課題と方法

過疎化の構造の動態的把握に取り組んだのは安達生恒（1981）である。安達によると、地域に残った住民は、地域産業の衰退、住民生活環境の悪化、自治体財政の窮乏化等、なにごとにつけ地域に活気がなくなっていくことで住民意識が後退し、やる気のなさは産業の衰退と生活環境の悪化にはね返り、さらなる人口減少や地域の活力の喪失を結果するという[7]。さらに乗本吉郎（1996）は「住民意識の後退」の内実を「事態がどんどん悪い方向へ進んでいるのに、有効な適応策が何一つ見当らない」状況であると指摘した[8]。つまり、あらゆる対応に有効性が認められなくなったとき、目指すべき方向性を見失い、立ち上がれなくなっていくことだと言えよう。

安達・乗本は過疎化の構造を読み解く上で「住民意識」に注目したため、彼らが提起した過疎地振興の方策とは「価値観の転換」が焦点とされ、そのためには「人々を主体的行動にかりたてる理想や理念」を獲得させるために「文化的知識人の指導」を用意する必要があると述べた。しかし、一般的な理想や理念がそのままその地域の構造を作りかえるのに一致するとは限らず、必ずしもよい理念の導入が悪循環を断ち切る十分な条件とは言い難いと思われる。そもそも、過疎地においては生活を規定する政治的・社会的・経済的諸構造（以下、地域の政治的・社会的・経済的諸構造を「地域システム」と定義する）自体が、生活の持続可能な方向に機能していないことが根本的な問題である。過疎地の地域づくりで目指されるべきは、住民意識と地域システムの連関を持続可能な循環へ作りかえることと言える。したがって、住民が過疎化の悪循環を内在的に断ち切る過程を「自律的な地域づくりの力量を形成する学習過程」として把握し、その展開論理を明らかにすることによって、過疎化の悪循環を生みだす地域システムを住民自身が再構成していくための条件を検討することができるのでは

ないだろうか。本稿では、そのような住民の学習過程を明らかにすることを課題とする。

さて、以上の課題を明らかにするために、生活を突き放し対象化する活動として、北田耕也（1999年）が提起した「民衆の労働と生活に根ざした美的表現の、プロセスを含めた達成の総体」としての「民衆芸術」に注目することができる[9]。北田は、民衆芸術は「支配的な意識や大衆の日常性をくつがえすはたらきを持つ」と指摘する。しかし筆者は、民衆芸術が必ずしも「支配的な意識や日常性をくつがえすはたらき」を持つとは言えない、と考える。なぜなら民衆芸術は「芸術」である以上「美的表現」として現実が再構成される契機が含まれている。つまり、再構成される際に「美的」ではないものや不都合なものが排除されてしまう可能性を含まざるをえない。しかし、過疎地域においてまず必要なのは、住民が本来求めている価値を意識化しつつ、生活を危機に追い込む不都合な地域システムの理解である。よって、上述の学習が行われる活動とは、北田の提起した「民衆芸術」の活動から「芸術」という文脈を取り去り、ありのままの生活自体を表現する活動であると考える。そして、ありのままの生活様式や人と自然・人と人との関係を「生活文化」と定義すると、「生活文化」とは、生活の方向性を定める価値体系の現象形態であるといえる。以上のように考えると、生活文化の表現活動が日常意識やそれを規定する価値、ひいては地域システムを対象化し、批判する契機へと繋がっていくものと思われる。よって、本稿では過疎地の衰退と住民意識の悪循環を断ち切る学習活動として「生活文化の表現活動（以下、生活文化活動）」が行われている実践に着目していく。

以上より、課題を明らかにするため以下の4点を検討していくこととする。

まず、「生活文化」を「表現」する活動であるという点に注目したい。「生活文化」を「表現」するという活動では、主体の持つ価値意識が「表現されたもの（作品）」に表出されてくると思われる。「表現」する目的や「表現（作品）」にこめた意味の変化をみることで、住民の価値意識が変容するプロセスを確認できると考える。

第二に、地域資源と地域についての認識である。地域における発展観の変化は、資源とされるもの自体や、資源の位置づけの変化となって現れよう。したがって、地域資源と地域への認識の変化を確認することで、それにともなってどのような発展観が確立されてくるのか明らかになると考える。

第三に、住民の関係性の変容プロセスである。地域づくりとは、地域システムの変革であり、それを為し得るには新たなシステム再構成の原理に基づいた地域内における諸関係の変革・創造が不可欠である。住民の関係性の変容を明らかにするために、地域住民に対する意識、共有された価値や課題を焦点としていく。

第四に、以上を踏まえて生成された地域づくりの論理である。

これらの検討を通して、「自律的な地域づくりの力量を形成する学習過程」と地域づくりにおける生活文化活動の役割が明らかになると考える。

以上の課題を明らかにするための対象事例として、北海道中川町エコミュージアムセンターの実践を設定する。中川町は高度経済成長を契機に人口が激減し、「中川町第4次総合計画（平成11～20年

度)」策定のための町民アンケートからは、町民が地域経済や地域社会の衰退を受け、地域に対して否定的な認識を形成していることが読み取れる、典型的な過疎地域である。このような地域の状況をふまえ、エコミュージアムセンターの学芸員によって、地域づくりの主体形成という文脈のもと住民ボランティアが生活文化を町内外から来る様々な人々にむけ紹介する活動が組織されている。以下では、このような中川町エコミュージアムセンターのボランティアの取り組みを生活文化活動ととらえ検討していく。

3. 中川町のまちづくり

(1)　中川町の概要

中川町は北海道の北部に位置し、北見山地と手塩山地の中央を流れる天塩川と、これに合流する安平志内川流域に沿って南北に細長く拓けた中山間の農村である。面積は 594.87 平方キロメートル、総面積の 84.5%が山地であり、農地は 5.91%、宅地は 0.17%である。人口は 1,885 人（平成 22 年、1 月現在）であり、昭和 32 年の 7,337 人をピークに一貫して人口流出が進み、過疎化・高齢化の進行している町である。15 歳以上の産業別就業人口（平成 17 年）は農林業が 20.3%で最も多く、次いで建設業が 18.2%を占めている。中川町は建設業者が天塩川関係の公共事業を担うことで栄えた背景があり、町民が中川町を「酪農というより公共事業のマチ」と述べるほどである。近年は農業者の高齢化・後継者問題や公共事業の減少により、中川町の産業は厳しい状況下に置かれている。

(2)　過疎対策の変遷

中川町は昭和 43 年に「山村振興地域」、昭和 46 年には過疎地域の指定を受けた[10]。町は過疎対策を打ち出すが、まず実施された「中川町総合振興計画書（昭和 45～54 年度)」から「第 3 次中川町総合振興計画（平成 1～10 年度)」まではハード面の整備が中心に行われた。しかし、平成 3 年に学術的に貴重な化石の発見がされたことで、町にとって「化石」は観光をはじめとする産業おこしの中心的な資源になりうるものとして着目され始める。その後、化石博物館を中心としたまちづくりの試みとして、町は「化石の里づくり構想」を策定するが、そのもとで行われる事業は博物館が学術的な情報や町の歴史に関するデータを町民から吸い上げ、それを博物館が再び住民に発信するという「地域財産」の啓蒙・普及的活動の形態であった。化石以外に中川町の生活文化も地域財産として扱われるが、策定にあたった職員によって「化石だけでは一部の町民しか関われない」ことが危惧されたことによるものであった。その後、学芸員自身が町外者との交流によって化石に限らない様々な地域資源の存在やその価値を発見する体験をしたことと、当時の町長が「住民との協働」を意識していたことによって「中川エコミュージアム構想」がつくられる。この構想ではエコミュージアムセンターが核となり「町民一人ひとりが学芸員」となって町民自ら「地域の魅力を新・再発見」することを通じた地域

づくりが目指された。

こうして、平成 13 年にそれまでの拠点であった郷土資料館が閉館され、翌年中川町佐久安川地区に自然誌博物館／宿泊型体験研修複合施設「中川町エコミュージアムセンター」がオープンする。その機能は、1）学術情報発信の場、2）学びと交流の場、3）地域住民のマチづくりの場、と設定され、事業が展開されていった。エコミュージアムセンターにおける活動では住民自身によって化石に限らず様々な地域資源の存在が発見され、活用されていくような学習が意図された。オープン当初は町外向け事業が多かったのだが、平成 17 年度からは学校教育と連携しながら中川町の子どもから大人まで「地域の魅力」を媒介して交流しあい、「地域の魅力を新・再発見」していく「ふるさと学習プロジェクト」が立ち上がり、現在は町内外に向けて様々な事業が展開されている。

その後、エコミュージアムセンターで掘り起こされた地域資源がある程度蓄積したことから、町はそれらを地域づくりへと活かしていくために平成 19 年度から「プロジェクト北の杜」（以下、「北の杜」）という観光産業創造への取り組みを開始して、「観光において資源となりうるか」という視点での地域資源の洗い出しや、そのための担い手づくりを意識した事業を展開している。その中でエコミュージアムセンターの事業も住民ボランティアが関わる活動は「北の杜」に位置づけられて展開されている。

４．エコミュージアムセンター実践の展開過程

(1) 活動概要

エコミュージアムセンターでは、「町民自らが地域の魅力を新・再発見」していくために住民参画の一環として 2 種類のボランティア活動が用意している。一つ目は「地域講師」といい、教育・普及事業の際、その事業で扱う内容に通じている町民が講師役として参加する活動である。二つ目は運営ボランティア団体の地域協力隊「エコール咲く」で、班ごとに宿泊者むけの食事提供や館内清掃、草刈り、ミュージアムショップ運営を担当している。

以下では、「生活文化活動」を行っている住民として、「地域講師」と「エコール咲く」調理班に注目し、住民の意識変容過程を明らかにする。

表 1　ボランティアの形態（平成 22 年 1 月現在）

	地域講師	地域協力隊「エコール咲く」
担当する活動	教育・普及事業の講師役・事業のサポート	センター運営（調理・清掃・草刈り・ミュージアムショップ）
参加形態	事業によって個人～団体参加	出られる人が自由に参加。 （一回の調理では約 5 人ほど集まる）
人数	約 50 人	調理班 18 人／全体 52 人

(2)　地域講師の意識変容過程

1)　地域講師の実践展開

1)-1　郷土資料館期（平成 9～13 年）

①　行政関係者となかがわ化石会

「化石の里づくり推進室」は、平成 9 年から郷土資料館のメイン事業として「地層観察教室」（年に 3～4 回）、翌年に中川町の自然や昔の暮らしを体験する「なかがわ体験教室」（年 1 回）を実施し始める。「地層観察教室」は「なかがわ化石会」のメンバーが、「なかがわ体験教室」では北海道立林業試験場の職員や一部の高齢者が数名ほど手伝いを頼まれ参加していた。よってこの時期、主に郷土資料館に関わる住民は「なかがわ化石会」のメンバーだけだった。すると、平成 12 年からの町外向けエコ･ツーリズム事業「森の学校」で、参加した都市住民から「もっと地域の人と交流したい」という声があがる。

②　交流要員としての住民

「森の学校」事業で参加者が地域住民と交流できるよう、職員は高齢者学級や地元の林業グループ等にもプログラムでの講師役を依頼するようになる。また、日頃から地域の活動に積極的な住民も関わり始める。こうして、住民の活動への参加の幅が少しずつ広がり始める。

1)-2　エコミュージアムセンター期（平成 14 年～）

①　町外向け事業中心～「森の学校」、「地層観察教室」「自然観察会」

しかし、センターオープン当初も主な普及事業は「地層観察教室」や「自然観察会」等で、住民が講師となれるような事業の分野に偏りがあった。また、センターは地域住民、特に子どもたちとの関わりをあまり持っていなかったため、住民から「町外に中川らしさを発信しているかもしれないが、町内でのセンターの役割は見えない」という批判を受けるようになる。

②　ふるさと学習プロジェクト（平成 17 年～）

センターは上述の批判に対して、多くの住民がセンターに関わることができるよう「中川ふるさと学習プロジェクト」を考案する。このプロジェクトでは、センターが中心となって学校教育と社会教育が連携し、学校の授業で地域（の人・もの）を活用できる場合は積極的に活用する方針がとられた。こうして住民が幼小中高の教育課程に関われるようになり、子どもから大人まで様々な住民の交流が生み出された。

③　住民によるアイディア・交流のひろがり／うましかの会

センターに関わる住民が増えていく中で、地域講師として参加している住民の中から、センターの事業で使えそうな昔の民具を提供する人、事業に来た子どものために恐竜プリントの T シャツ作りを提案する人など、活動をよりよくするためのアイディアが生まれてくる。またセンター職員が、地域講師のつながりづくりを意図した「森の学校」スタッフ打ち上げをきっかけに、地域講師や職員ら 10

名ほどで「うましかの会」という名前で不定期に飲み会を行い、交流を深めている。こうして、事業の区分を越えて地域講師同士が実践を助け合うこともみられるようになっている。

1)-3　プロジェクト北の杜（平成 20 年度～）

「北の杜」はいくつかの地域講師が関わる事業を「北の杜」のもとに位置づけた。例えば、「森の学校」はサイエンス・ツーリズムとして学術的な側面を重視して行われていたが、「地域の暮らしをベースとした「中川のいいもの」を地域住民が案内する中川ツーリズム」へと軸を移すこととなった。また、佐久老人クラブからの薄荷畑拡張と薄荷蒸留小屋建設の自発的な申し出も、「北の杜」の事業として位置付け、取り組みが進められた。

2)　地域講師の意識変容過程

2)-1　郷土資料館での取り組みを通して～エコミュージアムセンター実践の原型

中川化石会の初代会長 A さんは、研究者との協働作業から化石の学術的な意義を実感し、研究の一部を担う「使命感」を持っていた。こうして、その意義が人々に認知されるようにという思いで、事業に参加するようになる。B さんは化石の美しさに魅せられて化石を採るようになり、化石会の一メンバーとして事業の手伝いをし始めた。A さんも B さんも郷土資料館の頃から事業に関わっていて、そこでの子どもたちとの交流で感じた喜び・楽しさの体験が事業に関わり続ける動機のベースとなっていく。

2)-2　エコミュージアムセンターでの取り組み～日常意識の問い直しから地域づくりへ

①　町外向け事業～「森の学校」、「地層観察教室」「自然観察会」

事業の中では、子どもたちが化石以外にも道中のクワガタや植物、川の増水に感動したり、面白がる体験が起きた。「子ども達と一緒の目線で見ていくと、まだまだ遊べるものっていうのが無尽蔵にあるんじゃないか」（A さん）、「子どもの発想することは、大人にないようなところがある」（B さん）というように、地域講師にとって予想外の事柄に参加者の感性や好奇心が豊かに動き始めると、彼らは喜びを覚えた。そして参加者を興味深く観察し、参加者の日常意識を理解しようとすることで、自分の日常意識のあり方も意識し始めていった。こうして彼らは、化石以外にも子どもたちが生き生き喜ぶものの存在を知っていき、次の事業の際に「地域資源として伝えたい（表現したい）もの」が増えていった。

②　ふるさと学習プロジェクト

また、A さんはふるさと学習の一環で小学生の授業の草花遊びに参加した。そこで草相撲を一緒にした小学生が、はじめはおとなしく黙っていたが、A さんに勝った途端体いっぱいによろこびを表現した。それを見た A さんは「感動こそ、感性を育てる最高の薬だ」と気づき、「ここ（センター）で

の行事でもね、使えるんじゃない？そういう視点。一緒に行動しながら一緒に喜びを共有していく、感動を与える、与えられる。そういうことであれば、結果もの（化石）がなくてもね、それなりにね、楽しめるんじゃないのかなぁ」と考えるようになった。

もともと地域講師は実践における交流の中で、参加者が生き生きと感動する様子に自らも感動するといった喜び・楽しさの経験がベースであり、「人が楽しみ、喜び、感動するものかどうか」という文脈のもと地域資源を認識していたのだが、これまでその文脈自体に意識的ではなかった。それが、地元の子どもたちとの交流で自らが地域資源としてきたものの文脈自体を意識することが可能となった。活動において目指す価値が意識された A さんは、「ないもの同士が持ち味を出し合うとね、しっかり子どもたちに見せることできる」というように今まで気づかなかった住民の力量に気づき、他の地域講師をしている町民に「○○さん、僕にはない特技があるんだね」と声をかけるようになる。

③　地域変革・連帯形成にむけて

自分の伝えたいことや役割が明らかになると、それを実現するための条件整備を行うため、実践を規定する事柄が意識されていった。まず、実践の舞台であるエコミュージアムセンターについての評価がなされた。A さんは「(センターで）新しい触れ合いができたよね。お金で価値を見出すことはできない部分だけど、エコミュージアムの果たしている最大の役割」と見出している。B さんも「年中まちの中にいたら、自然の良さをもっと（求める）ね。来年また来ますとか言う子がいっぱい。そう言われるとやっぱり嬉しいもんね。だからエコのやってることは、最高いいんでないかなぁ」と思うようになったという。

続いて地域講師はセンターの維持・発展のための条件に注目していく。そこではセンターが町の施設であるため「町民がセンターにどのような評価をしているのか」が焦点となった。すると、「(町民は）いいものがたくさんあっても、「灯台もと暗し」で気付いてない」こと、「予算のことしか言わない」こと（B さん）など、センターに対する否定的な見方や、関心の薄さが明らかとなる。そこで、センターへの批判の正体を突き詰めていくと、「人間個々人のポリシーで生きてるかっていうよりも、究極的にはお金に集約されちゃってる」（A さん）という町全体を覆う価値体系、つまり地域システムの正体を理解することとなった。こうして彼らはセンターの意義を広げていくため、町民がセンターに足を運ぶきっかけづくり（中川化石会の採集した化石展を企画し、知人や所属団体のメンバーを案内する活動）を行っていった。

また、町内においてセンターを批判する層と支える層の存在が意識されていった。「エコール咲くの連中も、みんなで見守りながら、ここに加わってることに対する結果としての価値をみんなで共有してもらえればすごいんじゃないのかなって思う」（A さん）、「ボランティアの人がたは、(センターを）いくするために一生懸命なってる。金の価値の問題じゃないしょね。地域をもうちょっと活性化したいって（思い。)」（B さん）というように、彼らは自分と同様にセンターを支えるボランティアへのねぎらいや認め合い、励ましの必要性を語っている。つまり、自分の実現すべきことのために、彼らは

同じ価値を持つ者を求めるようになった。こうして、実際に他のボランティアとの交流が生まれていく。すると、「色んなことやってる人が集まって、これやるか、あれやるかっつってるんだよね。得意のとこはこっちがこうって、うまく出来てる。」（B さん）というように、他のボランティアの目指すものや、その方法論の豊かさに気付いていった。このように、地域講師たちは、互いの個性が自由にふくらみあって、様々なアイディアが生まれていく経験から、互いの豊かさを活かしあうことが新たな創造につながることを実感していった。

3) プロジェクト北の杜～地域資源の観光産業化という文脈

さらに、「プロジェクト北の杜」として「森の学校」がなされたことで、「観光として成り立つ＝その資源で町外からお金が入ってくるかどうか」という視点が形成されていった。「宴会の時、かみさんの持ってきた山菜に「結構いい素材あるじゃない」と思った。ただそれがビジネスになるかどうか（考えた）」と A さんが述べるように、来館者との交流で喜ばれたものは「産業化できる地域資源」という意味づけがなされる。しかし A さんはセンターの資源が産業資源として扱われていく中で違和感を覚え、センターがどういう役割を果たしていくべきか振り返っていく。以前のAさんは、「化石を活かした事業」で町外から人を集めようとしても、中川町は交通の不便さで不利と考えていた。「化石」がほしいなら、行きやすい場所の事業に行くことは当然だからである。しかし現在、町民それぞれの生き様や担ってきた役割を活かし、ふれあいがなされることで「人間としての豊かさが得られる」ことがセンターの存在価値であり、そうした価値で町外からも人が集うと考えを持つに至っている。また、Aさんはそのようなセンターの存在価値が地域において再生産されていくために、多くの町民で価値の共有をし、「人材育成」していくことが必要と考え、そのためには「センターのあり方が適切かどうか」踏み込んで考えることとなり、こうしてセンターの使いにくさを作り出す行政のシステム（「縦割り」など）が意識化されはじめている。

(3) 「エコール咲く」調理班

1) 調理班の実践展開

1)-1 動員～任務遂行期

① 動員期 （平成 13 年）

「エコール咲く」結成当初、メンバーの参加理由は町長や役場職員のために参加する人々と、「地元にできた施設だから」という思いで参加している人々がいた。町長・役場関係のボランティアは活動にかなり熱を入れていて、調理内容から金銭面等全てを握り、地元ボランティアは指示されるがままであった。

② 任務遂行期 （平成 14～15 年）

オープンから一年が過ぎ、中川町の町長選挙が行われ当時の町長が落選すると、町長・役場関係の

ボランティアが一気に 10 人ほど脱退する。こうしてそれまで調理班を牽引していた人たちがいなくなる。残った人々はリーダー的役割を置かずに運営を進めることとした。食事提供に関しては、メニューの工夫など行う余裕がなく、必死で活動していく。

1)-2　地域資源への着目→拡張→創造

①　資源の模索　（平成 15～16 年）

運営が安定して行えるようになると、提供するメニューのあり方についてメンバーそれぞれが考え始めるようになる。「よりおいしいものを」という思いで手製の苺ジャムや漬物を提供するメンバーが表れ始める。「中川町らしい」「センターだから食べられる」メニューづくりの声もあがるが、この時期にメンバーが合意できるメニューは生まれなかった。

②　資源の拡張→創造　（平成 17 年～）

ある時、市販のコーンスープを提供したところ来館者の反応が良かったことを受け、メンバーの一人が「中川町産のコーンでコーンスープを作ってみたらどうか」と提案する。すると「それなら作れる」という合意が生まれ、「エコール咲く」の新メニューとしてみんなで協力し、コーンスープづくりに取り組み始める。これをきっかけに、地元のフキを採ってきてみんなで漬けて提供したり、センターの庭に生えているアロニアの実を協力してメニュー化するなどの活動が生み出されていく。

1)-3　想定外のできごと～班長制・北の杜事業・食中毒　（平成 20 年度～）

平成 20 年度から始まった「北の杜」事業として組まれた事業「星澤幸子講演会・昼食会」の中で星澤氏に地元食材を使ったメニューに意見をもらう場が設定される。翌年は、4 月の宿泊研修のときに食中毒が発生してしまい、職員らは調理班が空中分解するのでは、と危機感を抱いていたが、メンバーは今までの意識を見直して活動のルール作りを行った。活動再開してからは、互いに声を掛け合いながらルールの徹底を行っている。

2)　調理班メンバーの意識変容過程

2)-1　軌道にのるまで

C さん・D さんは佐久地区の主婦である。二人とも、すでにボランティアとして活動している知人から参加を促され、地縁的な義務感から調理班メンバーとなっている。活動初期、参加するモチベーションは「交流」できることや「家とは違う作り方」を知ることなど、自分にとって直接有益であることが主だった。

調理班活動が 2 年目になりすぐ町長選挙が町で行われ、旧町長派で運営を掌握していた人々が一気にやめていく。メンバーは「選挙のことで来てるんでない。ここに協力にきてるんだ」（C さん）というように、センターでボランティアをする理由の振り返りを行った。また、以前の運営体制（一部の

決定権とその他の労働力）への批判がなされる。新たに採用されたのは以前とは対称的な、みんなで責任を持ちあいながら、意見を言い合う運営となる。こうして体制を新たに活動が始まるが、慣れない運営などあらゆることに余裕がないため、この段階ではメニューや来館者の様子には気を向けることはできなかった。

2)-2　新メニューづくり

①　資源の模索

作業に慣れてくると、活動中に余裕が生まれたことによりメンバーは新たな気づきをしていくようになる。例えば子どもたちから「おいしかった」と言われたりおかわりするのを見て、「(メンバー同士で）よかったねぇって言って、次もまたって（思う)」（C さん）ように、役に立てた喜びはメンバーの「またやろう」という気持ちを励ました。こうして、「残して先生に怒られてたら可哀想になぁとか、あんまりたくさん注がないほうがいいんだねぇと」（C さん）気付いたり、「ここにあるものを使ったら、食べる人もちょっと嬉しい気持ちになるんでないか」（D さん）と感じ始め、メンバーたちは「来館者への食事」におけるあるべきかたち（味・量・メニュー）に気を配り始めた。自分たちのつくる食事は「(町外の人が）中川町で食べる食事」「エコミュージアムセンター」で提供される食事、ということに気付いていった。こうして、センターの性格に注目したことで、センターは「中川の地域の魅力」を発信する施設と理解される。しかし、すぐには各自のアイディアは共有されない。なぜなら、「自分が出来ないのにアイディア出すわけにはいかない」（C さん、D さん）という風潮があったという。つまりそれぞれの得意・不得意などは考慮しない形式的な対等性であったことがいえよう。その後「エコール咲く」全体の総会での意見や、調理班内でも「中川らしい」料理を提供しよう、という機運は上がってくるが、センターの売りである「化石」に結び付けようとしたものや作りにくい料理が多く、企画倒れとなる。

②　資源の発見→拡張

市販のコーンスープの提供時、D さんが、「どうせなら中川町でもとうきびが採れる」ので、それをもらってきてコーンスープを提供するのはどうかとメンバーに提案する。C さんの「みんな作ってるから、やれないとは思ってない。みんな賛成したから、みんなで協力してやるようなった」という発言のとおり、自宅で作ったことがあるメンバーが多く、コーンスープはメニュー化が可能となる。このコーンスープは、中川町だからこそ食べることのできるコーンを使ったものであり、さらに日々の生活の中で食されているメニューなので、まさに彼女らの生活を支えるもののひとつであった。つまり、コーンスープは町民にとって地域資源と実感できる「中川らしい」メニューであったといえる。また、作ったことのないメンバーも作ったことのあるメンバーからを習い、家で作るようになっていった。「コーンスープ」は来館者が残さず食べ、反応の良いメニューとして認知されたため、子どもの朝ごはん時だけではなく夕飯時や大人の食事など様々な場にも出されていく。

また、メンバーはセンターの食事を考える上でセンターの性格（地域の魅力を発信する施設）を意

識したため、来館者の反応を色々知るにつれ、化石が採れることは町の特徴だと実感することとなった。こうして「様々な地域資源の存在を発見していける場」としてセンターは理解され、まちにおけるセンターの役割が意識されてくる。例えば C さんは、「まちおこしのために建てたのが、エコだと思う」ようになったり、D さんは「全然携わってないときは、すごいここにお金かけてそれだけの需要はあるんだろうかっていう思いはあったんだけど、実際に携わってみると、ひとつの中川らしいところじゃないかなぁって思う」ようになっていった。こうしてメンバーは、町民からセンターがどのように見られているのか意識するようになる。すると、「町民の意識としてはね、お金のかかるトコだって予算のときだけ見ないで、もうちょっとこの施設は大事なものなんだっていう意識でみてほしいなって思う」（C さん）という発言のように、メンバーは町民からの厳しい対応に気付いた。そして、町民や行政のセンター評価は妥当ではないと感じ､財政･経済面だけに注目しない判断を望んでいる。また、町民にそのような意識を脱却してもらうために、実際にセンターに関わってセンターの意義を実感してもらうことが必要と考えている。こうしてメンバーは、町におけるセンターの役割などに目を向けるにつれ､センターの活動一般や運営を支える人々の存在に気付いていき､「頑張っているのはあたしたちだけじゃない」（C さん）と、センターの活動を支える他のボランティアについても共感・ねぎらいを示している。

この時期になると、メンバーの関係認識にも変化があった。当初メンバーは責任が誰かに集中して負担がかからないような、形式的な「対等性」を維持しようとしていたが、「みんなと交流しながら、わいわいやるのは楽しい」（C さん）という発言にもみられるように、活動を経て互いの知恵を学びあい、メンバーが打ち解けたことによって生まれた、柔軟に役割を補い合う「チームワーク」が可能となる対等性へ育っていった。

③　資源の創造

調理班内ではコーンスープづくりを経て「地元食材かつ暮らしに根ざしたメニュー」ならば「中川らしさ」を含む料理と合意されたことで、そのような性格を持つメニューがどんどん発見され、各自自宅で作ったものを持ち込んだり、メンバー同士で協力して作ったりなどして､「中川らしい」メニューの広がりがみられた。そして、メニュー決めのときに「中川の紹介として、中川のもの一品はいれよう」（C さん）という雰囲気が作られていく。

こうした中、D さんは学芸員からセンターに生えているアロニアという実を使ってなにか作れないかという提案を受ける。アロニアは彼女たちにとって決して「日常的な食材」ではなかった。しかし、「中川の紹介」として「地元食材」を用いたメニューを出す経験が増えていく中で、メンバーの大半に調理経験があるわけではない食材も当然あり、その際自分の知らないメニューは、メンバー内において互いの知恵を学び合う経験として受け入れられ、その知恵が共有されていく、という背景が育っていた。こうして､「地元食材かつ暮らしに根ざしたメニュー」という「中川らしさ」は維持され、新たな食材から「中川らしい」新メニューを協力して作ることができたと思われる。

2)－3　調理班活動の維持・発展にむけた活動のあり方～想定外の出来事への対応を通して

平成 20 年度から始まった「プロジェクト北の杜」のもと、調理班は「星澤幸子料理講習会」で地元食材を使用したメニューをお披露目する機会を与えられる。この講習会の準備として様々な「地元食材づくしのメニュー」を考えなければならず、作業は大変なものであった。また、「料理の先生に食べさせる」というハードルを意識することとなり、メンバーは気を張りながら取り組むこととなる。よって、C さんは事業を終えてみて、「忙しかった…面白いところまでいかなかった。結構気をつかって、豪華にやってました。星澤先生に言われないように。大変だからもういいねってみんなで言ってます。」という感想を持っている。こうして調理班では、楽しめるほどの余裕は持てない、忙しい活動はすべきでないとの考えが持たれる。

また、平成 21 年に、調理提供した団体に食中毒が起きてしまう。この事件によって調理班は空中分解するのでは、とセンター職員や他班のボランティアから心配されていた。しかし、そうはならない蓄積があった。D さんは「去年はいろいろ作る夢が膨らんでいた」から、辞めたくないと思い、C さんも「事件があったからってその場で辞めるのも悔しい」と思ったという。また、「あの人（班長）たちだけに責任を負わして、やな思いさせて、っていうのができないから、じゃあみんなで協力して（建て直そうと思った）」（D さん）というように、チームワークの関係性が育っていたことによって、誰かに負担を押し付けずにみんなの力で乗り越えようという意識があることも一因であり、こうして調理班として活動を投げ出そうという空気にはならなかった。

調理班メンバーは今後の活動で食中毒を出さないために、保健所での研修をふまえ、今までの活動を振り返り、改めるべきことをルール化してその徹底をみんなで行っていった。まず、活動する上で最低限守らなければならないことが問い直され、基本に立ち返り「安全な食事の提供」の徹底が確認された。さらに、体調面で無理をしない範囲で活動に参加すべきであることも確認された。こうして、それまでのように様々な家庭料理を気軽に持ちこめなくなってしまったが、「食中毒」というリスクをふまえ、メニューづくりもみんなで取り組めるところから着実に一歩ずつ進めていくことや、無理をしない参加の仕方など、各メンバーが主体的に活動を進めていけるペースを守るためのルールが作られている。

「北の杜」や事件を経て、いまメンバーにとって活動の魅力とはどのようなものなのか。C さんは、「あたしは自分のペースで出てるから、楽しいです。久しぶりに会う人もいるし。いろんな話も聞けるし。ひとつの料理にしても自分のうちと違ったら色々わかるときもあるよ。そうやってみんな成長してるんじゃない？」「みんな、なんかがなかったら来ないんだろうなぁって思う。楽しいから来るとか。たまにみんなで会ってわいわいできるからね。」という。ここで彼女にとっての楽しさは、互いの生活の知恵を学びあったり、楽しく交流しあえることだと述べられている。互いの知恵の学び合いは初期から指摘されていたが、現在は「わいわい」とした交流のほうに重点が置かれている。また、C さんは目に見える報酬があるわけでないこの活動にメンバーが参加し続ける理由も C さんはそのよう

に推測している。そして、「職業じゃない、みんなボランティアだけど来るから、そこがすごい。そこがエコのいいところだと思うよ。」と述べているように、経済的な利益を追求するつながりではなく「交流」による喜びという価値によって結びついた活動が可能となっているセンターの特殊さ・重要性について言及している。そして、「肩肘はったら疲れるから、長続きしないの。だから気楽にゆっくり仲良く…体の続く限りやってったほうがいい」と、そうした活動が可能となる条件として各自のペースで活動に参加できることがあり、その維持を徹底していくことの重要性を指摘している。

D さんは「エコミュージアムに来たからアロニアのジュースも、コーンスープも各家庭作るようになって、そういう人も増えてきたし、そういうのはエコミュージアムにボランティア行くようになってよかったことだよねって（メンバーと）話してるの。」「協力体制が、いいのかな。自分一人ではなかなかできないけれど、いいよいいよーってみんな言ってくれるからできる。」という。つまり、自分が様々な地域資源の存在に気付き、その価値が人々に広がっていけたのもセンターのボランティアに携わるようになったからこそ、とセンターの活動が有する学習機能について指摘している。また、メンバー内で活動の目的が当初の「単なる食事づくり」から「中川らしいメニューづくり」へと刷新されていったことにより、一人のアイディアもみんなのアイディアとして共有され、実現されるような関係性が育っていることも読み取れ、その点を D さんが評価しているとわかる。

５．まとめにかえて　～生活文化活動を通じた地域づくりへの可能性

(1)　「生活文化」を「表現」することの意味

以上の分析をふまえ、「生活文化」を「表現」することは住民の意識形成においてどのような契機を作りだしたのか述べる。

第一に、自分の生活の中で培われた力量や専門性を活かした表現を行い、それに対して他者から肯定的な反応を得ることは、自らの力量を意識化する契機であった。特に過疎化の文脈の中で無能力感を抱いている場合は、自己信頼の回復となる契機といえる。

第二に、自分の意図した表現に対して思いもよらぬ反応を示された際、他者がそのような反応を示す理由を考察することは、自分とは異なる文脈の存在とともに自分自身の文脈が明らかになることであった。自分たちが過疎化の中で抱いていた「資源の乏しい町」という否定的な文脈の絶対性を壊し、地域の持続可能性が見出されるという意味において希望を与える契機であった。

また、「大人―子ども」間の交流においては子どもに伝えるべき普遍的な人間的価値（共に活動し感動を共有する喜びなど）が注目されていた。したがって、第三の契機として、「大人―子ども」間の交流は、人間的価値を意識化する契機だったといえよう。

第四に、形成しつつある新たな文脈に基づいた表現に対して肯定的反応がなされる経験は、文脈への確信を作りだす契機だった。こうして日常の中で潜在化していた地域資源を発見する新たな文脈が

形成され、彼女らは地域の可能性を意識化することができた。

(2) 地域資源認識と地域認識

続いて、表現活動を通じて地域資源の認識がどのように深まり、地域がどのように認識されたのか、その発展プロセスを明らかにする。

地域資源認識については、地域講師ははじめセンターの事業のテーマとして「一般的に地域資源とされている事柄」に表面的に着目し、その事柄（化石）自体が学術的価値をもつものとして認識していた。①その後、表現活動を通して他者から新たな資源の意味（一緒に活動する中で喜びを共有するためのもの等）を与えられた。②続いて、「参加者の喜びを引き出した事柄（自然など）」を新たな資源として発見する体験（資源の拡張）を重ねていった。こうして、新たな価値意識が形成されはじめる。③そして自分が実現したい価値自体が意識化されたとき、資源は「価値を実現するための手段」として認識されるに至った。それによって、生活の中から価値を実現できる事柄を資源として認識することが可能となるため、目的のために資源を創造することが可能となっていた。また、このような資源の創造を可能としたのは学び合いの関係だった。「エコール咲く」内には、あるメニューを作ったことのないメンバーが家で作ってみるために、そのメニューを作ったことのあるメンバーから教わるという学び合いの関係があり、その価値を支えていた。

以上より、「生活文化」として「地域資源」を「表現」することは、それまで抱いていた過疎化の文脈を批判的に意識する契機であり、こうして住民は自身が本来生活において押し広げたい価値やそれに基づいた地域資源の存在を見出せるようになっていった。

④さらに、自分の価値を実現していこうとすると、価値を制約する条件、つまり地域のシステムや、それが内包する価値体系の存在を意識化していくことができた。その上で、自分自身の持つ価値を広げるシステムを評価し、それとの違いを通して地域システムを再構成するための見通しを得ることができるようになっていった。

(3) 連帯形成への条件

続いて、以上の地域づくりを可能たらしめる条件として、連帯のあり方を検討する。

「地域講師」の場合は、価値を押し広げていくため、価値に共鳴する仲間の必要性が意識された。それによってボランティア間に交流が生まれ、相手の価値観や信念、自分にはない方法を持っていることを知ることができた。こうして様々な個性が出会うことで豊かな方法論が生まれる経験がなされ、「互いの個性を認め合い、学び合う共同的な関係」がそれを保障することを見い出していった。

「エコール咲く」では、活動初期のメンバーの関係性は、自分が浮かないような配慮をそれぞれがしているという形式的な対等性であったが、食事を協同で作っていく中で各自の生活の知恵を学び合ったり、それぞれのメンバーが地域におけるセンターの役割に自覚的になり地域づくりの課題意識が

共有されることを通して、それぞれの差異に基づくアイディアを活かし合いながら活動に取り組む「チームワーク」としての対等性が育っていった。さらに、食中毒事件を契機に活動のあり方が問い直されたことで、「チームワーク」が成立するための条件として「自分のペース」での参加、つまりそれぞれが主体性を発揮し合える参加の仕方を保障すべきと確認された。

したがって、実質的な共同関係が成立するための条件とは、①共通の課題意識、②各自の個性や知恵の認め合い・学び合いからなされる創造の体験であり、さらにそれを保障するものとして③各自の主体性が発揮されるペースを保障することだと考えられる。

(4)　エコミュージアムセンターで形成された地域づくりの論理

以上より、センターの実践を通して形成された地域づくりの論理とは、地域住民が来館者への生活文化活動を通じて、地域資源を媒介としながら見出した「人間的な価値」の実現を活動の目的として、そのために自分の活動を制約するシステムの再構成へむけて取り組んでいくことであった。また、そうした地域づくりを可能とする連帯の条件として、「共通の課題意識」のもと「各自の個性や力量を認めること」、さらにそれを支えるために「各自の主体性が発揮されるペースの尊重」を保障すべきであることが明らかになった。

(5)　結論

本稿は「生活文化活動における自律的な地域づくりの力量を形成する学習過程」を明らかにすることを課題とした。それは、自分の「生活文化」に根ざした「地域資源」を「表現」することと「他者」の反応を媒介として地域システムを対象化→評価→再構成しようとする過程であった。

中川町の事例からは、「生活文化活動」を通じて両ボランティアともに人間的価値を追求していく生活のあり方、さらには地域システムを再構成するための論理が生み出されていたといえる。現在エコミュージアムセンターは、行政が進める町のアイデンティティの産業化を目指すまちおこしや、商工会が進める経済的発展に役立つ資源の掘り起こしを目指すまちおこしから注目されながらも、単にそれらに組み込まれるのではなく、センターで見出された人間的価値を土台として経済を組み立て直すようなあり方を志向するという第 3 の発展の道を示しているように思われる。もはや、センターの学習機能は単に過疎化の悪循環を断ち切るにとどまらず、人間らしく生きられる地域システムの再構成まで見通すものと言ってよいだろう。

本稿において明らかにされた論理は、これまでの過疎研究で語られてきた「外部から新たな価値や理念を持ち込むことで悪循環を断ち切るという方法論」とは異なり、自らの生活世界に潜んでいた価値を顕在化させ、それを現実的に押し広げていこうとすることで内在的に悪循環を断ち切り、地域システムの変革を見通していく論理といえるのではないだろうか。これを、経済の論理が人々の生活を支配するという転倒した状況をくつがえし、経済を「社会へと埋め戻す」手がかりの一つとしたい。

[1] 岡田知弘『地域づくりの経済学入門』自治体研究社、2005 年、p,22

[2] 保母武彦「地方社会の貧窮と荒廃はどこまで進んでいるか」、『日本の科学者』Vol.43 No.11、2008

[3] 乗本吉郎は、過疎地住民の「踏んだり蹴ったりの状態で世論からも疎外され無視されながら、インドの不可触選民（ハリジャン）と同様、まるで階層的不満がない」心理状況を「危機感なき危機」と呼んでいる。乗本吉郎『過疎問題の実態と論理』富民協会、1996 年、p,308

[4] 同前、p,205。山本努『現代過疎問題の研究』恒星社厚生閣、1996 年など

[5] 大野晃『山村環境社会学序説』農山漁村文化協会、2005 年、p,28

[6] 下平尾勲『地元学のすすめ――地域再生の王道は足元にあり――』新評論、2006 年、p,111~166。

[7] 安達生恒『過疎地再生の道』日本経済評論社、1981 年、p,79

[8] 乗本吉郎『過疎問題の実態と論理』富民協会、1996 年、p,247

[9] 北田耕也『自己という課題』学文社、1999 年、p,145

[10] 「中川町史」1975 年。